

[症例・事例・調査報告]

実習指導者が指導者としての役割を遂行していく 過程とその影響要因

志田久美子¹⁾, 袖山 悦子¹⁾, 望月 紀子¹⁾

キーワード：実習指導者，実習指導者講習会，学生指導

Process by which practical training instructors perform their duties and its effect factor

Kumiko Shida¹⁾, Etuko Sodeyama¹⁾, Noriko Mchiduki¹⁾

Abstract

This study was conducted to clarify what practical training instructors who had completed the practical training instructor's session had experienced in the session, how they put the experience to use to perform their roles as instructors, and its effect factor. Participants were seven practical nursing training instructors completing their practical training instructor session in a prefecture. The mean age was 38.7 years and the subjects were all females. The length of experience as practical nursing training instructors was 4 years and 3 months on average. The data were acquired through a listening-based survey in a semi-structured interview and later analyzed using the "modified grounded theory approach". The results revealed that instructors used slogans towards their trainees. In addition, there were unable and sometimes embarrassed instructing students due to their lack of skills. One of the factors that made student instruction difficult was a gap between the instructors and staff. Therefore, measures such as setting up workshops for the practical training of staff may be necessary.

Key Words : practical training instructors, practical training instructor's session, student instruction

要旨

本研究は、実習指導者講習会を修了した実習指導者が、講習会でどのような経験をし、それをどのように役立てて指導者としての役割を遂行しているのか、またその影響要因を明らかにすることを目的に行った。研究対

象者は、A県内の実習指導者講習会を修了した臨地実習指導者7名である。平均年齢は38.7歳。全員女性である。臨地実習指導者としての経験年数は、平均4年3ヶ月である。半構造化面接による聞き取り調査で得られたデータを「修正版グラウンデッド・セオリー・アプロー

2010年11月1日受付、2010年12月21日受理
新潟医療福祉大学 健康科学部 看護学科

[連絡先] 志田久美子
〒950-3198 新潟市北区島見町1398番地
TEL・FAX：025-257-4552

チ」を用いて分析した。その結果、次のことが明らかになった。

実習指導者が指導者としての役割を遂行していくプロセスは、実習指導者講習会で、[学生理解の深まり][思考の転換][学生の立場に立つことの再認識][実習指導者の役割]といった【講習による学び】から、[実習指導者のモットー]を持って学生指導を行っていた。しかし、実習指導をする中で[学生の状況に気づけない自分][学生指導に困惑]といった【学生指導上の困難】を体験していた。学生指導上の困難を体験した場合、乗り越える要因としては、[受講仲間のフォロー][スタッフ間の学生指導の統一化][教員との連携]があった。学生指導を困難にしている要因の一つに【乗り越えられないスタッフとの壁】があった。スタッフに対しての実習指導に関する研修会を設けるなどの対策が必要であると考えた。

I はじめに

看護教育は、学内における授業と実習から成り立っている。実習は、既習の知識を統合して実践する難易度の高い科目であり、臨地実習指導者（以下、実習指導者）の果たす役割が重要となる。先行研究¹⁾では、実習指導の内容や方法、指導者の心理的側面、指導者のレディネスなどに関したものはみられるが、臨地実習指導者養成講習会（以下、実習指導者講習会）でどのような学びをし、それをどのように役立てて実習指導をおこなっているかという研究は見当たらない。そこで、本研究では、実習指導者が実習指導者講習会でどのような学びをし、それをどのように活用し、その役割を遂行していくのかその過程を明らかにし、どのようなサポートがあれば、効果的に実習指導ができるのか示唆を得る。

II 目的

実習指導者講習会を修了した実習指導者は、講習会でどのような経験をし、それをどのように役立てて指導者としての役割を遂行しているのか、またその影響要因を明らかにする。

III 用語の定義

臨地実習指導者：実習指導者講習会を修了し、学生指導を行っている看護師をいう。

IV 研究方法

1. 研究デザイン

本研究のデザインは質的帰納的研究であり、木下²⁾が提唱する修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、M-GTA）を用いて分析した。

M-GTAは、社会的相互作用に関係し、人間行動の予測

と説明に関わること、研究テーマによって限定された範囲内における説明力に優れた理論であることに加え、方法論が明確である。本研究のテーマである実習指導者が指導者としての役割を遂行していく過程は、講習会での教員や実習指導者、研修仲間、臨床現場でのスタッフや学生といった様々な人々との相互関係の中で、変化していくものと考えられるので、分析に適していると判断した。

2. 研究対象

A県内にある200床以下の病院1ヶ所と500床以上の病院2ヶ所に勤務する看護師で、8週間の実習指導者講習会を修了した7名を対象とした。対象者の選定は、所属や個人が特定されないように複数ヶ所の病院とした。対象となった看護師の平均年齢は38.7歳（34～45歳）。全員女性である。臨地実習指導者としての経験年数は平均4年3カ月（1年半～9年）である。

3. 研究期間

2009年11月～2010年2月

4. データ収集方法

- 1) 半構造化面接による聞き取り調査：面接は個別に行い、面接回数は1回、面接時間は30～60分である。面接内容は対象者の同意を得て録音し、逐語録を作成した。
- 2) 聞き取り調査の内容：実習指導者講習会での学びの体験と講習会終了後、その学びを学生指導にどのように活かしているか、学生を指導する上で困難を有した体験、充実感を得た体験などについて語ってもらった。

5. 分析方法

逐語録が完成したものから順次分析を開始し、データ収集と分析作業を同時並行で行った。M-GTAの手順に沿って継続的比較分析を行った。分析テーマは、“看護職員臨地実習指導者養成講習会を受講した実習指導者が指導者としての役割を遂行していくプロセス”とし、分析焦点者を看護職員臨地実習指導者養成講習会を受講した実習指導者とした。

具体的手順としては、まず1例分のデータ全体に目を通し、分析テーマに照らして重要と思う文章あるいは段落に注目し、分析焦点者にとっての意味を考えながら概念を生成していった。

一方、2例目以降のデータにおいて、1例目で概念化した具体例の類似例あるいは反対例を確認し、新たな概念を生成していった。これらの作業と同時並行で、概念間の関係性も検討し、概念の意味にまとまりがあるものをカテゴリー化し、全体の関係を図式化していった。分析の過程では、適宜質的研究をしている看護教員のスーパービジョンを受けた。

V 倫理的配慮

本研究は、新潟医療福祉大学倫理委員会の承認を受けて実施した。研究対象者に対して、研究の主旨、協力依頼内容、データの取り扱い・管理方法、個人が特定できないように固有名詞は記号に変換し、概念の具体例の記載においては、個人が特定されないように配慮した。

VI 結果

分析の結果、実習指導者講習会を受講した実習指導者が指導者としての役割を遂行していくプロセスは、図1に示すように、実習指導者講習会で[学生理解の深まり][思考の転換][学生の立場に立つことの再認識][実習指導者の役割]といった【講習による学び】から[実習指導のモットー]を持って学生指導を行っていた。しかし、実習指導をする中で[学生の状況に気づけない自分][学生指導に困惑]といった【学生指導上の困難】を体験していた。その場合、何とか自分で問題を解決しようと[指導方略の模索]をしたり[学生の居場所の確保]をするといった【実習指導の取り組み】を行っていた。また、一人で解決できない場合は、上司に相談し[スタッフ間の学生指導の統一化]を図ったり、[教員へのフォロー依頼]をしたり、[教員との指導の統一化]を図ったり、[教員への要望]を出すといった【教員との連携】をとっていた。さらに、[受講仲間のフォロー]を受けて[実習指導者としての充実感]を得たり、[看護の原点に立ち戻る]体験や[実習指導者の特権]を感じるといった【実習指導者としての意欲向上】を持つに至っていた。しかし、一方で【乗り越えられないスタッフとの壁】を感じており、そのことが学生指導を困難なものにしていた。

以下にカテゴリーと概念について具体例をあげながら説明する。なお、文中ではカテゴリーを【 】、概念を[]で表し、定義を下線、具体例を「 」で示す。

1. 【講習による学び】

実習指導者は、講習会において以下のような【講習による学び】を体験していた。[学生理解の深まり][思考の転換][学生の立場に立つことの再認識][実習指導者の役割]の4つである。

1) [学生理解の深まり]は、講義を受けることで学生に対する見方が変わったということである。以下に具体例を示す。

「自分たちの時代とはちょっとずつ変わってきているんだなって。一人っ子も多いし、年齢層の違う人と付き合いが少ないんだと、そんなふうに思いました。」

2) [思考の転換]は、臨地実習指導者は、学生の指導

をする人であると捉えていたが、講習を受けることによって学生と一緒に看護を学ぶ人であるということを学んだということである。

「教えるというより、一緒に学ぶっていうことが大切ということが、どの講師の話の裏にもあるような気がして、それが一番印象的でした。」

3) [学生の立場に立つことの再認識]は、講習を受けることで、学生の立場に立つということの重要性を再認識できたということである。

「講習会で病院実習に出た時に、学生の立場になってみて居場所がない、なんていうんでしょうか、申し訳ないみたいなそんな感情。どこに居てもいかな分らない。そういうのがとても心に残りました。」

4) [実習指導者の役割]は、実習指導者としての役割を具体的にどのようにしたらよいのか講習時に先輩の実習指導者を見て理解できたということである。

「そのA病院さんでは、(学生に)じゃ、まず座ってと言って……。まずこういうのが環境を整えるってことなんだなと思ったんです。」

2. [実習指導のモットー]は、実習指導者として学生指導をする時に心がけていることである。

「できるところはきっちり認めて、看護って楽しいんだなという風にしてあげたいというのが自分の中にあるのでそういうところを大事にしています。」

3. 【学生指導上の困難】

実習指導者は、実習指導において様々な困難を体験していた。【学生指導上の困難】は、[学生の状況に気づけない自分]と[学生指導に困惑]の2つの概念で構成されていた。

1) [学生の状況に気づけない自分]は、実習で学生が戸惑ったり、どうしてよいのか迷ったりしているという事実に気づかず指導しているつもりでいる自分に対して不甲斐無さを感じることである。

「学生さんには(実習の)最後にアンケートを書いていただくんですよ。指導はどうでしたかと。その中で看護師によって言うことが違うので戸惑った。誰に聞いたらいいのかわからない。というのがあったんですね。こっちは指導しているつもりなんですけど、学生にとっては迷ったという事実。それが最終的な事実なんですよ。」

2) [学生指導に困惑]は、どのように指導したら学生が理解できるのかわからず戸惑うことである。

「カンファレンス中、学生さんが感極まって泣いたりとか、そういうのを受け止めたりフォローしたりするのがちょっと大変でしたね。」

4. 【実習指導の取り組み】

実習指導者は、【学生指導上の困難】を感じた場合、どのように指導したら学生に効果的な指導ができるか考えて取り組んでいた。【実習指導の取り組み】は、[指導方略の模索] [学生の居場所の確保] の2つの概念から構成されていた。

1) [指導方略の模索] は、どのように学生指導をすればよいか試行錯誤することである。

「ちょっと時間をもらって、その学生と一緒に学校の看護過程の資料を出して一緒に考える時間をとったんですけど、結局少ししか解決はしなかったんですけど……。」

2) [学生の居場所の確保] は、学生が実習場所に受け入れられているという安心感をもてるように環境を整えることである。

「(学生の) 気持ちを踏みにじらないとか、頑張ろうとか、明日も来ようとか、サポートしてくれる指導者がいるとか、一緒にやってくれる人がいるだけで頑張れるんだと思ったので、居る場所を作ってあげたいなと、安心して来れる場所というか、そういう気持ちで……。」

5. [スタッフ間の学生指導の統一化] は、学生が混乱したり、迷ったりしないようにスタッフ間で、学生の指導についてどのように対応するか決めておくことである。

「(学生の) アンケートをもらった時に、看護師長ともう一人の指導者と話をして、こういうことがあったというのは事実なので、次にそういうことにならないように、指導者がいない時に誰に聞けばよいか、それから、看護師によって言うことが違うというのは、それぞれ考えが違うので、いろいろな意見があって当然です。その中で患者さんにとってどれがベストかということを考えていくのが看護過程ですということを(学生に) フィードバックしていくことにしました。」

6. 【教員との連携】

実習指導者は、【学生指導上の困難】を体験すると、【教員との連携】をとっていた。【教員との連携】は、[教員へのフォロー依頼] [教員との指導の統一化] [教員への要望] という3つの概念で構成されていた。

1) [教員へのフォロー依頼] は、実習において学生が困惑したり、感情的になったりした場合に、指導者としての自分の対応を教員に伝え、その後の対応を依頼することである。

「心ないこと、例えば、手洗いの件ですけど、そういうことがあった場合に、学生さんがちょっと落ち込んでいるので、私はこういうふうに声を掛けましたとか、その後のフォローをしてもらえるようにと

か。現場だけでも学生さんが気落ちしたら困るので、先生にもフォローしてもらえるように、自分が思っている状況をお伝えして。いろいろ対応してもらおうと落ち込まないと思うので。」

2) [教員との指導の統一化] は、学生にどのように指導してよいのか分からない時に、教員に相談して指導方法を決め、学生を混乱させないようにすることである。

「私はこう思うけどっていうのがある時に、うその指導はできないので、先生にこういう風に学生さんが言っているんだけど、私はこう思ったんだけど、学校でどんなふうに教わっているんですかって言ったら、それはこういう意味ですっていうと解決したり、学生さんを混乱させないためにも私と先生がコミュニケーションをとって学生さんに関わるのは効果的だと思います。」

3) [教員への要望] は、事前に実習指導上必要な学生の情報が欲しいと思うことである。

「学生がトラブルっていうとあれですけど、前も学校に来れなくなってメンタル面でフォローが必要な子がいるということとか、そういうところは事前に情報があるといいなと思います。」

7. [受講仲間のフォロー] は、同時期の受講者に実習指導上で困難があった場合に相談できて心強いと思うことである。

「迷った時に、メールしたり、電話をしたり、会って相談ができるので……。仲間が出来たので宝ができました。」

8. 【実習指導者としての意欲向上】

実習指導者は、実習指導を通して実習指導に対する意欲が向上していた。【実習指導者としての意欲向上】は、[実習指導者としての充実感] [看護の原点に立ち戻る] [実習指導者の特権] の3つの概念から構成されていた。

1) [実習指導者としての充実感] は、自分が学生に関わり、学生に頼りにされたり、学生に良い変化がみられて実習指導者としての満足感を得ることである。

「(看護過程を) 一緒にして、(学生は) 一つでも書けたことがすごく嬉しいことだったんですね。そのプランを次にやっていました。わかってくれたって私も嬉しかった。」

2) [看護の原点に立ち戻る] は、学生から看護について問われたり、看護師として見られていることを感じて看護について改めて考えさせられることである。

「先輩の看護師として見られている。だからきち

んとしなきゃいけないというか、大事なことっていうか、そういうことはできないなっていうのは思いましたね。いつもきちんとしているつもりなんですけど、やっぱり日々の業務の中で患者さんの気持ちを忘れてたりとか、仕事にルーズになったりするのがあるので、ハッとして、やっぱり看護の原点を感じました。純粋な目で見られているから。」

3) 【実習指導者の特権】は、実習指導者として学生指導に関わっていることで、新しい知識を得ることができると思うことである。

「理論ですね。学生さんは概論は学んできているので、そういう思考で患者さんに接するので、それに近づいてアドバイスができるように。わからないところは、先生に、学生さんがこういう風に考えているけど、私はよくわからないので何か資料があったら見せてくださいとか、私自身が理解するためにも、先生がいるっていうこと、先生とコミュニケーションとれているから、私も教えていただく。学生さんと関わっていると同時に、多分先生は指導者も教えているんだと思うんですけど……。」

9. 【乗り越えられないスタッフとの壁】

実習指導者は、学生指導に対するスタッフの受け止め方にギャップを感じ、どうにかしたいと思っているが自分ではどうにもならないと感じていた。【乗り越えられないスタッフとの壁】は、【解消できないスタッフの負担感】【スタッフ教育できない自分】という2つの概念で構成されていた。

1) 【解消できないスタッフの負担感】は、スタッフに実習指導の楽しさを伝えたり、学生の実習受け入れに対するスタッフの負担感を取り除くことができないもどかしさを感じることである。

「他のスタッフは（学生が実習に来ることを）毛嫌いしている人もいると思うんですけど、この良さをなかなか私も伝えられていない。いくら楽しそうにしているもなかなか伝わらない。」

2) 【スタッフ教育できない自分】は、研修で学んだ学生指導のあり方をスタッフに教育できない自分にもどかしさを感じることである。

「スタッフに対して難しいなって思います。学生に興味がないと、もう学生なんてってなるので、そ

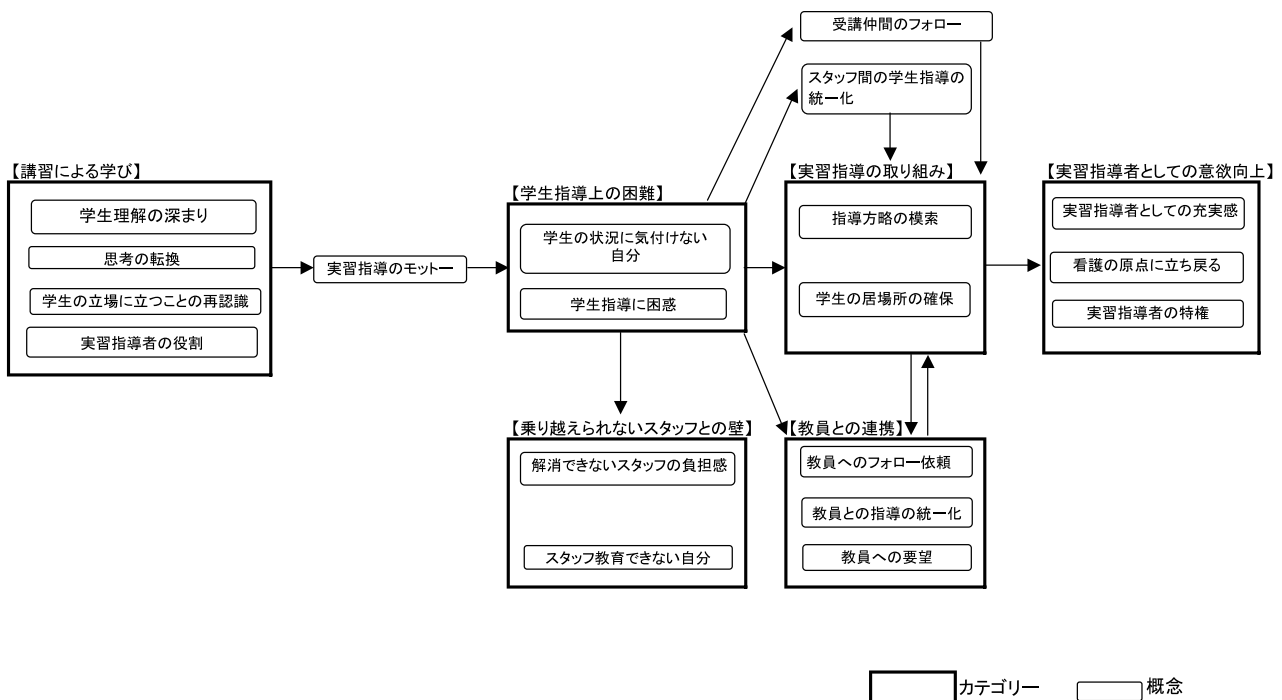


図 1

れがちよっと板挟みじゃないですけど、その辺が難しいなって……。」

Ⅶ 考察

本研究では、実習指導者講習会での学びから実習指導者としての意欲向上までを一連のプロセスとして示すことができた。

実習指導者は、実習指導者講習会で、[学生理解の深まり][思考の転換][学生の立場に立つことの再認識][実習指導者の役割]について学んでいることが明らかとなった。米田³⁾らは、教育・指導方法を学ぶことと教育対象を理解するというを講習会での学びとして報告しているが、本研究で特徴的なのは、[思考の転換][学生の立場に立つことの再認識]である。講義や実習を通して、実習指導者に対する考え方が、教える人から学生と一緒に看護を学ぶ人という捉え方に変わり、自分が学生の立場になってみて初めて居場所のない学生の状況が実感でき、その体験を通して、学生の居場所の確保を心がけていた。このことは、看護職として経験を積むごとに忘れかけていた自分の学生時代の状況を思い起こさせ、学生が実習しやすい実習環境を整えることにつながったと考えられる。

実習指導者は、学生指導をする上で様々な困難を体験していた。自分は学生を指導しているつもりでいても、実際は学生を混乱させているという状況に気づけていない自分がいたり、学生の理解を促すためにはどのように指導したらよいか、感情的になっている学生への対応をどのようにしたらよいかと困惑していた。大高⁴⁾らは、初めて実習指導を担当した看護師の実習指導における困難として、指導内容・方法や指導に対する不安を報告している。本研究においても、指導内容・方法については、大高らの結果と同様に困難を感じているといえる。講習会で講義を受けてもそれだけでは、実際の場面で適切な対応ができるとは限らない。様々な場面を経験し、省察することを通して、困難を乗り越えていくことが可能となるものと考えられる。また、学生の感情面への対応についても、講習会での学びと経験を積む中で検討し、対応していく必要があるのではないかと考える。

困難を解決する要因としては、[受講仲間のフォロー]、[スタッフ間の学生指導の統一化]、【教員との連携】があることが明らかとなった。しかし一方で、【乗り越えられないスタッフとの壁】も抱えていた。高島⁵⁾らは、臨地実習指導者は、スタッフへの働きかけの難しさを感じていると報告しているが、本研究においても同様の結果であった。実習生を受け入れることによるスタッフの負担感を軽減したり、講習会で学んだ実習指導に關

することをスタッフに教育することに難しさを感じていた。このことは、実習指導者が一人で解決できる問題ではないといえる。例えば、学校側で病院のスタッフに対して、実習指導に関する研修を実施するなどして、実習指導者一人で抱え込まず、病棟スタッフが一丸となって実習指導ができるような対策が必要であると考えられる。スタッフの実習指導への考え方が変わり、協力が得られるようになると、実習指導者としての意欲も更に向上し、学生指導も更に充実するものと考えられる。

今回の研究では、理論的飽和化までは至らなかったで、今後、さらに対象者を拡大し理論生成を目指す必要があると考えられる。また、実習指導の経験年数によっても困難感や実習指導の取り組み方も違ってくると思われるので、経験年数による違いについても研究していく必要があると考えられる。

Ⅷ 結論

1. 実習指導者は、実習指導者講習会において、[学生理解の深まり][思考の転換][学生の立場に立つことの再認識][実習指導者の役割]について学んでいた。
2. 学生指導上の困難を体験した場合、乗り越える要因としては、[受講仲間のフォロー][スタッフ間の学生指導の統一化]【教員との連携】があった。
3. 学生指導を困難にしている要因の一つに【乗り越えられないスタッフとの壁】があった。スタッフに対して実習指導に関する研修会の機会を設けるなどの対策が必要であると考えられる。

引用文献

- 1) 奥坂喜美子・工藤快枝：臨床実習指導者に関する研究の現状と課題，日本看護学会 看護教育，34：154-156，2003.
- 2) 木下康仁：グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践，弘文堂，236-237，2003.
- 3) 米田照美・前川直美・沖野良枝：実習指導者講習会が指導者の役割遂行に及ぼした影響，人間看護学研究，6：77-90，2008.
- 4) 大高恵美・佐藤サツ子・佐藤美恵子：療養型医療施設における臨地実習指導の現状と課題—初めて実習指導を行った臨地実習指導者と病棟管理者の面接調査より—，日本赤十字秋田短期大学紀要，10：39-47，2005.
- 5) 高島尚美・渡部節子・青木由美恵ほか：成人学習者としての経験を活かした臨地実習指導者研修プログラムにおける学びの様相，横浜看護学雑誌，1(1)：35-43，2008.